



©小林正典

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CYR CARING FOR YOUNG REFUGEES

2010年9月
NO.95

Children, Our Future

子どもたちの明日

目次

設立30周年活動報告会「子どもたちと歩んだCYRの30年」いいぎり ゆき	2
「みんなで布チョッキン」協力者によるパネルディスカッション	4
トロピエンスバイ小学校・幼稚園、510人の病気ランキング	6
働く卒園児の今 サム・スレイさん	7
～連載～ 給食レシピ⑥「魚と冬瓜のスープかけごはん+スイカ」	8

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。



1980~2010

子どもたちと歩んだCYRの30年

5月29日(土)、CYR設立30周年を記念した活動報告会を行いました。

テーマは、カンボジアの子どもたちにずっと愛され続けてきたCYRの遊具・教材について。

設立代表のいぎりゆきより、これまでの歩みを振り返るメッセージが寄せられました。

30年前、外の世界を禁じられた鉄条網の内側で、カンボジア難民の子どもたちは、まだ記憶になまなましい兵士の姿や戦場に飛ぶヘリコプターを粘土の形にして遊んでいました。どれも同じように見える塊を指差し、「ベトナム兵、ポルポト兵」と見分ける幼い子の目は、陰いおとなの眼差しにそっくりでした。そばには鍋や七輪、スプーンの形をした乾いた粘土も並んでいました。キャンプに着いて、やっと食べ物がある日々を得た子どもたちの安堵が聞こえた時期でした。恐ろしい戦いと飢えを逃れた後、幼い心と体が求めているのは、なによりも生命を尊び、安全な生活環境でした。

キャンプの保育室は、粗末な竹囲いの土間でしたが、そこには子どもたちが手で触れて形や感触を捉え、目で見て色や形の違いを見分け、音を聞いて違いを聞き分ける、といった感覚体験を促す教材がいくつも用意してありました。どれもが、まだ周囲の事柄が十分に理解できていない子どもの、未分化な心と体の発達を大きく助けるためのものでした。整えられた環境は、子どもが生まれ持った生命力一育つことを目的にしたカーを大きく伸ばします。

幼い難民を考える会が試みたのは、このような環境づくりを、外部の者ではなくキャンプに暮らす人たち自身の手で実現させることでした。物が極端に限られたキャンプ暮らしの不幸が、幸いに転じたのは、自由はないけれど時間のあるおとなが子どもの周りにいたことです。

人びとは、子どもたちが喜ぶ遊具や教材をつくる喜びを知りました。最初は手本を見て、後にはじぶんたちのアイデアを生かして、人びとがいていねいに作った



初期文字表



1992年。難民がカンボジアへ帰還する時、まだ祖国を見たことのない子どもがいる家族全員に文字表を手渡しました。

教材紹介② 文字表

絵の名前を口にすると、文字の「音」がわかります。子どもたちは、物の名まえや文字を覚えることができます。

表と同じ「絵」と「文字」が切り離された文字カードと一緒に使うと効果的です。カードを見ながら表の文字や絵を探して置く遊びは、文字の形を見わけて判断する力を養います。現在は、カンボジアの全幼稚園で活用されています。



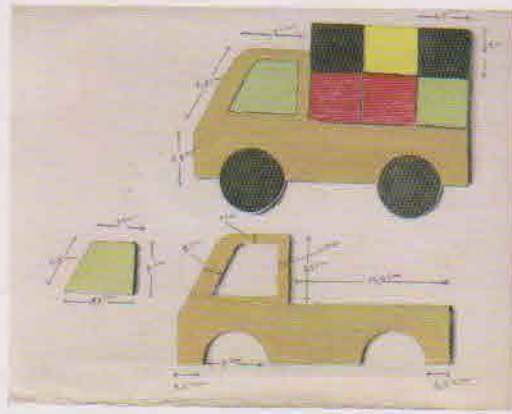
現在の文字表(改訂版)



文字カード



文字表で遊ぶ



難民キャンプ初期のパズルの設計図

教材紹介① 車パズル

本でできたパズルで、形を合わせて遊びます。キャンプの子どもたちは、これで本当によく遊びました。初めてパズルに触れる子どものために、分かりやすい形を選んでいました。遊びながら、正方形、台形、円などを識別できるようになる他、色の名前や前後、上下も覚えられるように工夫されています。

遊具や教材の数々。それを使う子どもたちの生き生きした様子は、故郷や家族を失って難民になった人びとを勇気づけるに充分でした。

13年後、難民の祖国帰還が始まりました。キャンプ閉鎖が決まったのを機会に、保育活動はすでに国境に近いタイ農村で根付いた保育に加えて、難民が帰っていったカンボジアの村でも始まり、広域な仕事へと発展しました。

子どもは、おとなとなる「自分」をつくり上げようと成長します。私たちにできるのは、子どものその大事業を支えることではしかありません。心強いことにOYRIはこの30年間、沢山の賛同者と支援者の力をいただいて、保育の仕事に専念することができました。私たちが心がけているのは、哀れみの気持ちから「物」を届けることではありません。物が不足していても、カンボジアの子どもたちの心はとて豊かです。キャンプの人たちが手がけ、大切にしたこと—限られた「物」に込められた大勢の人の思いやり、おとなにとっての子ども時代への共感、いまま明日に向けた希望です。

さらに、届けた布でつくられた人形やボールが培う想像力、感覚の世界の遊び、ことば、物の概念、人の気持ち—これこそ私たちが子どもの世界を共有して、成長のよるこびを共感できるかけがえのない瞬間です。

これらの活動が、やがてはカンボジア人の手でしっかりと根付くように日本とカンボジアの職員は励んでいます。日本からの支援が、個人あるいは地域や職場、学校のグループを単位にした熱意に支えられて続く限り、地球社会に向けた私たちの貢献は、年毎に大きな実を結んでいきます。

いいぎり ゆき



公立幼稚園で車パズルで遊ぶ(2006年)



現在の人形(2007年)

©OYRI



難民キャンプの保育室(1981年)



キャンプの子どもたち

教材紹介③ 人形

人形を作り始めて30年が経ちます。当初から、母親の手で作れるようにと考えられました。難民キャンプでは、子どもたちが大切に抱きかかえたり、話し相手にしたりしました。時代が移って国が変わるうちに、髪型や目鼻立ちが、いかにもその国の人形らしく変わってきています。人形は、子どもたちの心を育て、ことばや社会性を学ぶのに大切な役割を果たしています。

「みんなで布チョッキン」協力者によるパネルディスカッション報告

●田中道子さん
(特定非営利活動法人
WE21ジャパンかながわ 代表)

●荻野紗良さん&福里那波さん
(横浜雙葉高校3年生)

●吉田亜砂子さん
(ゴールドマン・サックス証券株式会社
コーポレート・エンゲージメント)



「みんなで布チョッキン」 協力のきっかけは？

●田中-----

「売り切れなかったものを 有効活用したい」

WE21ジャパンでは、WEショップというリサイクルショップを運営していて、服や雑貨などを売って収益をNGOに支援しています。お店ではどうしても売り切れない物がでてくるので、これをもっと有効に使えないかな？というのが課題でした。そんな時に「みんなで布チョッキン」のことを知って、「これはいい！」と思いましたね。

●荻野&福里-----

「カンボジアとつながりたい」

横浜雙葉高校では、2年生の総合学習の時間に、グループに分かれて自分の選んだNGOを1年間支援します。わたしたちのグループは、総勢15人でCYRの支援を先輩から引きつぎました。募金や切手など物資の提供を行う団体が多かった中で、「みんなで布チョッキン」に大きな魅力を感じたからです。自分たちが切った布でカンボジアの女性が遊具をつくり、

さらに子どもたちが遊んでくれるということで、カンボジアとつながっていることを実感できると思いました。

●吉田-----

「海外の受益者へ直接貢献したい」

ゴールドマン・サックスでは、OTW(コミュニティ・チームワークス)という社員参加型のボランティア・プログラムを推進しています。国際協力をしている団体と一緒にできる活動を探していたのですが、ほとんどが事務作業やイベントサポートで、実際に受益者となる海外の方たちに直接貢献できる活動がなくて、困っていました。そんな時にCYRさんに出会って、「これだ！」と思ったんです。

具体的な取り組み方法は？

●田中-----

「ママグループと一緒に」

神奈川県には、布のおもちゃづくりを行うシュシュという若い子育てママグループがあることを知って、そこと一緒にやったら

どうかという話が進みました。ママたちは布の作業は行いますが、募金となると、ちょっとハードルが高いですね。だから、募金の部分をわたしたちが受け持つという形をとりました。当日の会場には子どもたちも一緒に来て、にぎやかな時間になりました。ママたちはCYRのスタッフの説明を聞いて、カンボジアの子どもたちの現状をはじめて知ったと言って、心に留めてくれました。

●荻野&福里-----

「布を集める工夫いろいろ」

まずは布提供の呼びかけから始めました。学校全体に放送でアナウンスして、教室や家庭科室にポスターや箱を設置しました。できるだけ多くの人から集める工夫として、文化祭でジュースを売った時に布を提供してくれた人には値引きを行うことにしました。工夫の甲斐もあって、箱に収まらないほどのたくさんの布が集まって、次の代に持ち越したほどです。また文化祭では、寄付を集めたり、カンボジアの女性で作ったシルク製品を販売したり、展示をしたりして、多くの方々にCYRのことを知っていただきました。

●吉田-----

「毎年、5回ずつ」

毎年、CYRさんと相談して完成個数の目標を設定しています。1回15人くらいの規模で、2006年から毎年5回くらいずつ行っています。約半日かけて実施していて、これまでに265人の社員が参加しました。





みんなで布チョッキンとは？

カンボジアの子どもたちのためにボールと人形をつくる参加型ボランティアプログラム。型紙を使って布を切って、出来あがった個数に合わせて募金をそえます。企業、学校、団体など、さまざまなみなさんにご協力いただいています。

実際に体験してみて

●田中-----

「地域から世界を知る」

みんなで布チョッキンは、布が有効に活用できることも大きな魅力ですが、布好きな人が取り組みやすく、それが支援につながるという構図がとても分かりやすいです。

WE21は主に女性が中心となって、神奈川県で53のショップを運営しています。メンバー間でCYRへの支援はかなり広まりました。布チョッキンだけでなく、給食募金などを通じて活動に関心が寄せられています。

また地域の女性たちは、国際協力に関心をもつようになってきました。人口の半分は女性ですよ。世界には、差別や権利を主張するのが難しいケースもたくさんあります。みんなで布チョッキンは、カンボジアの女性が人形やボールを作り、賃金を得る仕組みが考えられています。女性たちはお金を得ることで力をつけることができるわけです。力がつくと、権利も主張できるようになってくると思います。地域から世界の状況を知ること、そして身近にできることに取り組む雰囲気を広めていきたいですね。

●荻野&福里-----

「自分を後回しにする心構え」

募金を集めるために、横浜そごうのフリーマーケットに出展したんです。その時に、収益金はカンボジアの支援にあてることを呼びかけると、快く募金をしてくださった方がいた一方、「もっと安くしてほしい」と値引き交渉を持ちかけてくる人が多くいて、本当に残念でした。ボランティアをする時に大事なものは、「自分のことを少し後回し

にしよう」という心構えではないでしょうか。わたしたちとは比べ物にならないほど苦しんでいる人たちに、微力ながらも支援を届けたいという気持ちから始まるはずです。自分のことを優先させていては、いつまでも支援に結びつきません。

そして、「自分ひとりの力では何もできない」という言葉に逃げないこと。もちろん、ひとりの力には限界はありますが、それでもできることはたくさんあると思います。そういうことから目をそらして、「誰もやっていないから、わたしもやらない」と思ってしまふこと。それがボランティア活動をする上で一番の妨げではないかと感じました。

布集めから送るところまでのこの活動は、大変でしたがとてもやりがいがありました。自分たちも今は教育を受ける側ですが、子どもたちにとっていかに教育が大切かということ、また自分の置かれた環境がいかに恵まれているかということを感じました。日本では物が当たり前のようにあふれていますが、これは決して当たり前のことではないということも良く分かりました。

CYRの活動によって、今の子どもたちが教材や遊具からたくさんのことを学び、おとなになった時にその次の子どもたちに伝えていくという良いサイクルができれば、きっと素晴らしい変化が生まれるのではないかと思います。

布チョッキンは、「カンボジアの子どもや女性の力になりたい」と思う方なら誰でも気軽に参加できる活動です。ぜひ多くの方に参加いただき、また多くの方にこの活動を広めていただきたいと思います。

●吉田-----

「企業としてボランティアをする意義」

布チョッキンを始めて5年目を迎えますが、とってもしピーターが多いんですよ。活動に参加した社員に、プロジェクトへの参加を決めた理由や、活動を行ってみて感じたことを聞くと、「意義がわかりやすい」「カンボジアの子どもの教育に貢献できる!!」「チームで協力して目標を達成するのが楽しい」「忙しいので、オフィスにいながら海外の子どもたちのために活動できるのが素晴らしい」などという答えが返ってきます。

ボランティア活動に対してよく言われるのが、「ほんとに役に立つの?」「大変そう...」「時間がない」の3点なんです。この全ての疑問に答えを出してくれるのが、「布チョッキン」だと思います。特に、「役に立つの?」は大切です。CYRさんには、毎回必ず活動の意義についてプレゼンをしていただき、さらに活動後には、カンボジアに布が届いた様子や、現地の方からのお礼メッセージをお送りいただくなど、その成果まで報告していただけるのですが、これがとてもいいですね。

仕事上でコミュニケーションをとっている社員は限られています。部署の垣根を越えて社員同士が協力してボランティア活動を行うことで、社内のネットワーク作りも可能になるんです。仕事以外の視野も広がります。これがきっかけになって、個人的に支援を始める社員も出てきました。このような支援を行っている会社で働いているということに対して、社員自身に会社への誇りを持ってもらえること。そして、自分が培ったビジネススキルを、今度は社会のために役立てることができるという機会に恵まれることは、企業としても大変素晴らしいことだと感じています。



フノンペンの貧困層が多く住む
「トロピエンスバイ小学校・幼稚園」
510人の病気ランキング

- 1位: 肺炎・気管支炎
 <原因: ウイルス感染、飛沫感染>
- 2位: 下痢、胃痛、腹痛
 <原因: 細菌感染、不衛生>
- 3位: 皮膚病
 <原因: 不衛生、伝染>

トロピエンスバイ小学校では、給食の提供に加えて、栄養補給のため月に2回豆乳と卵を配給しています。



子ども一人ひとりの状態を健康ノートに記入



喉の状態をチェック



自分の体重、見えるかな。カンボジアでは、5歳未満のうち3人に1人が低体重児です

貧しくて
病院に
行けない

栄養不足

不衛生な
環境

カンボジアは感染症がとても多いため、フノンペンの貧困層が多く住む地域にあるトロピエンスバイ小学校・幼稚園では、健康診断を行っています。カンボジア人担当医師のチャイ・クレー先生は、「この村では、ほとんどの家族が貧しい生活をしています。不衛生な食事などが原因で病気になる子がたくさんいますね。さらに伝染病が多いので、子ども同士で感染してしまうのも問題です。」と感想を漏らしました。健康診断をきっかけに、保護者や先生など周りのおとなが予防に対する意識を持つようになり、子どもたちの健康が改善されることが期待されています。

働く卒園児の今

CYRが保育園を開いて18年。
卒園した子どもたちは、今どうしているのでしょうか？

縫製工場で働く

中学2年生で、学校を中退しました。16歳の時です。それからは、家族の生活を支えるために縫製工場で洋服の梱包などの作業をしています。

でも、工場側が従業員ときちんと契約を結ばずに、急にやめさせたりしているので、今はストライキ中なんです。みんな不満をいっぱい抱えています。もう半月になります。いつ解決するかは今のところ分かりません。

最近の仕事がなくなってしまったので造花づくりをしています。一日に1.25~1.5ドルしかもらえないので、困っています。収入は、すべて母に渡します。



サム・スレイさん 17歳
プレイタウ保育園卒園

家族構成と仕事

祖母：無職
母：食べ物の小売
兄：精米所
本人：縫製工場

どんな仕事？

内容：縫製工場内の梱包作業
勤務日：月曜日～金曜日
勤務時間：7:00-16:00
収入：50~70ドル/月

嬉しいことは？

友だちがいっぱいできたことや、給与がもらえること

将来の夢は？

警察官になりたいです！
悪い人を捕まえて、人を助けたいから。



臨時で行っている造花づくり

給食レシピ⑥

魚と冬瓜のスープかけごはん+スイカ

カンボジアの子どもたちが食べている給食のレシピを、連載でご紹介します。



魚と冬瓜のスープかけごはん +スイカ

材料 (5人分)

雷魚(ブリ、タラでも可)	2切れ
冬瓜	1/4個
トマト	中2個
タマリンド	15g
にんにく	1/2かけ
ナンプラー	20g
塩	小さじ1/2
やし砂糖	大さじ1/2強
香草	5g
水	1リットル

■ 下準備

1. 魚をひと口大に切る
2. 冬瓜、トマトを小さく切る
3. にんにくをみじん切りにする
4. 香草を小さく切る

■ 作り方

1. なべに水を沸騰させる
2. 魚とにんにくを入れる
3. 魚に火が通ったら、なべから取り出す
4. あくを取り除く
5. 冬瓜とトマトを入れる
6. 冬瓜に火が通ったら、取り出しておいた魚を戻す
7. やし砂糖、塩、ナンプラー、タマリンド、香草を入れて味を調える
8. ごはんにかけて、できあがり

目標
1,000人

給食がつくるカンボジアの未来 「月いち募金」サポーター募集

銀行口座、郵便局、クレジットカードを使って自動引き落としで寄付ができます。
日に換算すると、1日30円=カンボジアの子どもたちの給食約1食分！
ぜひご協力ください。

特徴

1. 毎月、自動引き落としなので、振込みの手間が不要です
2. 毎月最低1,000円から、金額を設定して募金できます

お申込み方法

同封の月いち募金チラシの裏面(お申込書)にご記入いただき、ご返送ください

1,000人達成まで
あと960人

